

心を動かす「語り」の指導についての研究

－能楽の「謡」を中心として－

富山敦史・川畑恵子・若森達哉

(奈良教育大学附属中学校)

松川利広

(奈良教育大学 教育開発講座(教職大学院))

Move the heart study of the guidance of the “Narrative”

About the “Recitation” of Noh

Atsushi TOMIYAMA, Keiko KAWAHATA, Tatsuya WAKAMORI

(Nara University of Education Junior High School)

Toshihiro MATSUKAWA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：国語科における伝統的な言語文化の育成は、従来、評価の定まった教科書教材の古典を中心にすすめられてきたが、当時の庶民に愛好されていた「芸能」の中にも、教科書教材の古典を典拠とするものが多く、「芸能」の中で語られた解釈の有り様が、当時の人々の価値観を知るうえで大きな手がかりとなる。本研究では、能楽を中心に文楽、歌舞伎などに挿入された物語の典拠を明らかにしつつ、語り物や口承文芸としての民間芸能の世界にも触れながら、能楽のDVDや動画サイトなどICTの積極的活用や体験活動的な教材化を図り、児童生徒が自ら「謡」を「語る」体験的活動を通して、語り物の成立過程や伝承について理解を深め、登場人物の心情や背景をよりよく理解できる指導法を提案したい。

キーワード：能 Noh 伝統芸能 Traditional arts 民間芸能 Private entertainment 語り物 Katarimono
口承文芸 Oral literature 語り Narrative 謡 Recitation

1. はじめに

1. 1. 世界無形文化遺産としての能楽

能楽は、2001年5月にユネスコの第1回「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言」を受け、2008年11月に無形文化遺産保護条約に基づく「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された。上記の宣言では、次の(1)「選考基準」のいずれかの条件を満たすとともに、(2)「考慮基準」の6つの基準を考慮する必要があった。

(1) 選考基準

- ・たぐいえない価値を有する無形文化遺産が集約されていること
- ・歴史、芸術、民族学、社会学、人類学、言語学又は文学の観点から、たぐいえない価値を有する民衆の伝統的な文化の表現形式であること

(2) 考慮基準

- ・人類の創造的才能の傑作としての卓越した価値
- ・共同体の伝統的・歴史的ツール
- ・民族・共同体を体現する役割
- ・技巧の卓越性

- ・生活文化の伝統の独特の証明としての価値
- ・消滅の危険性

このように、無形文化遺産として世界的に認められた能楽であるが、日本人がどのくらい能楽について関心をもっているのだろうか。

1. 2. 小・中学校における教材としての能楽

能楽とは能と狂言を合わせていうことばである。狂言は小学校国語科教科書に取り入れられており、「附子」や「柿山伏」などは特に有名である(その他の小学校教材では「しびり」(24年度三省堂5年生)がある)。しかし、能については、文学史的資料としての記述はあるものの、本文としては『高砂』の謡が中学校教科書1社(東京書籍)に採られるのみである

高砂や、この浦舟に帆を上げて、この浦舟に
帆を上げて、月もろともに潮の、波の淡路
の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に
着にけり、はや住の江に着きにけり

能が小中学校の教材として取り上げられにくい現状について、奥忍(2014「声と色と動きの統合表現 - 子どもた

ちの「能」学習 日本音楽表現学会第12回大会での口頭発表(2014.6.22.)は、次のように指摘している。

- ・能の台詞が、「語り物」の中でもっとも遅く発音、発声される。
- ・歌のように際だった音高変化をしない。
- ・義太夫のように声色が内容に沿って変化せず、感情表現の変化に乏しく、時間がかかる
- ・抑制された動き、統制された動きでの表現は、子どもの身体リズムとかけ離れている。
- ・能の視覚的な美しさが現行の創作重視の美術教育の内容からやや外れている。
- ・図画工作科、美術科における鑑賞活動が低調で日本美術の占める割合が少ない。

そして、奥はこれらの課題を乗り越えるためのアプローチとして次のように提案している。

- ①能楽は専門的な修練を積んだ者でなければ正確に表現できないものではあるが、アウトリーチに頼るだけでなく、普段子どもを指導している教師が直接教える機会を設定すること(本物との密接な関わりを前提とする)。
- ②能狂言の鑑賞学習と表現学習をつなぐ子どもの体験学習を重視すること。
- ③声と言葉の学習の系統学習を進める。発声や歌唱を重視すること。
- ④それぞれの発達段階で子どもが「何を面白いと思うか」を能楽の要素の中から抽出すること。例えば、擬音語、擬声語の繰り返し、かけ声、名のり、謡など。発達心理学的に小学校(低中高)・中学校、高校への連続性を持たせること。
- ⑤統合学習として教育課程を組織すること。
能の総合芸術としての要素を国語、図工・美術、体育(身体表現)の教科の要素と組み合わせることで総合表現力の育成を目指すこと。
- ⑥能の文化性、精神性に基づき、子ども自身の内なる深化を目指すこと。

1. 3. 能についての知識、関心—生徒アンケートから

能楽について、子どもたちはどのような知識、関心を持っているのだろうか。附属中学校の1年生(生徒数151人)を対象にアンケート(記述式)を実施した。なお、事前に予備知識は全く示さなかった。アンケートの項目を以下に示す。

「能」についてのアンケート

1. 能を知っていますか。
2. 能を見たことがありますか。
3. 能とはどのようなものですか。・姿・服装・道具・楽器・所作など
4. いつ頃できましたか。時代や関係する人物など
5. どこで成立しましたか。国や土地・場所

6. 誰がはじめましたか。人名など

7. 『高砂』を知っていますか。

【アンケート結果の概要】

1. について、「知っている」が77人/152人中
2. について、「見た」62人で、写真(小学校教科書・資料集・電車内ポスター)が最も多く、具体的な映像としては、テレビ放送37人(NHK 邦楽の時間、大河ドラマの中場面等)、小学校教材DVD9人が挙げられる。また実際の能を見た者は、能舞台5人、修学旅行2人、体験教室や小学校での芸術体験教室10人であった。
3. について、一番に挙げられたのが面(能面)で、次に衣装(派手な着物)、舞、踊り、楽器等を挙げていた。2.での写真やポスターから得られる視覚的印象が大きいと思われる。逆に小学校での体験教室等の実際の体験を経た者は、ゆっくりした動作や独特のせりふや所作、太鼓、笛を挙げており、実際の動きや音楽の印象が強いと思われる。
4. について、奈良4人、平安18人、鎌倉7人、室町35人、江戸16人であった。
5. について、日本古来のもの28人、伝来(中国5人・朝鮮半島1人・アジア1人)、場所としては京都16人、奈良3人、江戸6人、兵庫1人、関東1人、出雲1人、厳島神社1人であった。
6. について、観阿弥・世阿弥(かんあみぜあみ)17人、かんあみ2人、ぜあみ1人、金春氏1人、黙阿弥・竹阿弥1人、出雲阿国4人、近松門左衛門2人、貴族2人、楽器演奏者1人、朝鮮の人々1人、一般農民1人、足利義満1人、平清盛1人、江戸の人々1人、なんとかの親子父子1人であった。観阿弥や世阿弥の漢字が書けずに平仮名で書いた生徒の中には、「かんあみぜあみ」で一人だと思っていた者も若干名いた。また、歌舞伎や浄瑠璃と混同しているものも見られた。
7. について、「知っている」が20人で、百人一首で出てきたという者が4人「高砂の尾上の桜咲きにけりとやまの霞たたずもあらなむ」(前中納言匡房)、「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」(藤原興風)を挙げていた。その他として、家にある高砂人形、神社、テレビ、小学校の体験などが挙げられる。また「高砂やこの浦舟に帆をあげて」までを覚えているものが2人いた。

以上の結果と奥の提案を踏まえて、能の学習を教材化するにあたり、次のことをポイントにしたいと考えた。

1. 能へのアプローチを謡から始めること。
生徒の能についての情報が視覚的なものが多いことを踏まえ、聴覚に訴えたいと考えた。圧倒的な謡の声の力、迫力、リズム(拍子)の妙を体験させたい。その際、能楽師による模範と一緒に稽古ができる動画を活用したい。能楽のDVDや動画サイトなどICTの積極的活用をしていく。
2. 体験活動的な教材化をすること。

1. でも述べたが、模範となるものを示し、一緒に

稽古できる時間を設定し、身体全体で能をとらえられるようにしたい。音楽科とも連携し楽器・囃子についての体験的な教材化を図る。

3. 地元「奈良」に関わる古典を教材に取り入れること。

例えば、本校の近くにある不退寺は在原業平縁の寺院である。生徒たちは学校行事である「春の奈良めぐり」で訪れているが、能との関わりについてはよく知らない。『井筒』との関わりで『伊勢物語』などへと興味を広げていくことができるなど、奈良ゆかりの古典作品と歴史的地理的理解へとつなげていきたい。

4. 和歌や言葉の学習に結びつけること。

能に出てくる和歌や謡に使われる様々な典拠を持った言葉や表現技法に気づかせることで、能が現在の日常生活にも深く関わっていることを認識させたい。

2. 授業展開例

2. 1. 指導計画

今回の実践は、文化庁委託「伝統音楽普及促進事業実行委員会」が作成したDVD教材「能は面白い！」(2014)を中心に据えて生徒の実態に即して、授業を構築した。授業を組み立てるにあたっては、生徒の興味関心がどこにあるのかを見極めることが肝要で、提示する教材が短時間(授業時間中)で能の本質を子どもたちに伝えられるものであることを目標とした。授業は全5時間とした。

■第1次(全3時間)

○第1時「謡(うたい)について」

- ・『高砂』の謡の視聴(DVD教材)
- ・『高砂』視聴の感想を書く→気づきの交流
- ・謡『高砂』のお稽古(DVD教材)
- ※関連動画(YouTube)
- ・「能をやってみよう! 謡「高砂 待謡」田茂井廣道」(9:53)

<https://www.youtube.com/watch?v=Bw7chrgnThQ>
・「仕舞 高砂」観世清和(13:13)

<https://www.youtube.com/watch?v=hi7RGDswPzU>
・お稽古の感想交流

○第2時『高砂』の暗唱と能についての説明

- ・『高砂』の暗唱(場面あらすじ・拍子)
- ・『高砂』の謡の発表
- ・能についての説明
- ・能の歴史と特徴(DVD教材の視聴)
- 能舞台について、謡について、囃子について、型(所作)について
- ※関連動画(YouTube)
- ・「京都子ども能楽囃子教室「中之舞」お手本」

<https://www.youtube.com/watch?v=50ITHzIPQLI>

- ・『高砂』(後シテの部分)の視聴(DVD教材)

○第3時『船弁慶』子方と名のり

- ・『船弁慶』について(DVD教材)
- あらすじ(27:52-33:43)
- 装束(33:47-35:18)
- ・子方(義経)の謡と知盛の名のり(DVD教材)
- ・謡の稽古(DVD教材)
- 1 子方(義経)「その時義経少しも騒がず」
- 2 知盛の名のり「そもそもこれは～幽霊なり」
- ・『船弁慶』(後シテ平知盛)の視聴(DVD教材)
- ※参考資料(動画)
- ・子方の謡の映像・お囃子の映像(稽古と実演)

■第2次(全2時間)

第2次では、能楽協会京都支部・京都能楽会の作成した「能とはどんなものか」「能「井筒」」を抜粋して使用する。

○第1時『井筒』について

- ・能の特徴と演技(DVD教材)
- ・あらすじ「在原業平」と有常の娘について
- ・『伊勢物語』の和歌と「歌物語」について
- ・奈良と能楽について 不退寺 在原寺 在原神社 天理市 筒井筒旧跡 等

○第2時『井筒』の視聴(解説入り短縮版DVD教材)

- ・『井筒』視聴の感想を書く→気づきの交流

2. 2. 指導案(第1次について)

第1次の3時間はワークシートを作成し、それらに記入しながら授業をすすめた。★は生徒の反応や感想を示す。

○第1時「謡について ワキ方有松遼一さんのお稽古」

時 間	学 習 活 動	支援及び指導上の留意点	評価の観点・評価基準 等
3分	謡『高砂』を視聴する。	迫力ある音量に設定する。 予備知識は示さない。	画面に注目しているか。
10分	感想・気づきを書き、交流する。	必要に応じ声の出し方、姿勢、拍などに注目させる。	観点を持ち、気づきや感想を書いているか。
20分	DVD に合わせて練習する。	必要なのはメモさせる。 音程は気にせず声を出す。	大きな声が出ているか。 姿勢に注意しているか。
7分	練習後の気づき、感想を書く。	気づいたことを発言できる雰囲気をつくる。	謡うことに意欲的に取り組んでいるか。
10分	本時の振り返り	次時の予告	

★声の出し方は難しいが謡ってみたら楽しかった。音の強弱、抑揚、伸ばす所が難しいが一緒に稽古して楽しくなった。ゆっくり稽古したので難しい所のコツが少しずつ学べた。芯のある大きな声を出すのが難しい。初めは難しかったがどんどんやっていくうちにどんどん謡い方がわかり謡えるようになった。狂言とは違う謡で新しかった。本物の謡に近づけるようになりたい。やってみると思ったより簡単だった。しっかり聴いてみて素晴らしいさが伝わってきた。声を上げる所のお稽古が一つ一つを丁寧に指示してくださったのでよく理解することができ

きた。細かいコツがあることで様々な表現ができることに気づいた。身振り手振りをすると自然に声が調子を合わせてくれるし、気持ちも込めやすい。息の継ぎ方が難しい。謡は、歌と音読の間みたいで楽しかった。

○第2時『高砂』の暗唱と能についての説明

時 間	学 習 活 動	支援及び指導上の留意点	評価の観点・評価基準 等
5 分	拍子に合わせ謡『高砂』を謡う。	指導者の拍子に合わせて、大きな声で読ませる。迫力ある音量を徐々に出していかせる。	拍子に合わせて大きな声で読んでいるか。拍子について謡えているか。
3 分	『高砂』のあらすじを聞く。	登場人物や地名など、あらすじを把握できるよう黒板に説明を書く。	あらすじをもとに場面をイメージしようとしているか。
5 分	『高砂』を暗唱する。練習する。	拍子に合わせて練習する。ペアで練習させる。	正確に覚えているか。迫力ある声で暗唱できているか。
27 分	能の説明 DVD を視聴する。	メモを取りながら聞く。疑問点もメモさせておく。 ①歴史や担い手②能舞台 ③謡④囃子⑤型（所作）	能の歴史や表現に興味をもって視聴しているか。メモができているか。
10 分	『高砂』（後シテ）を視聴する。	印象に残った場面を感想として書かせる。	感想が書けているか。

今回は『高砂』の言葉を暗唱することを目標にしたので、音の高低や抑揚にはあまり拘らず、拍子に合わせて謡うことを重視した。一定の拍子に言葉を乗せることで、前回難しかった伸ばす所や切る所が意識できるようになり、短時間で自分で拍子を取り抑揚もつけて謡える生徒が増えてきた。楽しい雰囲気の中で暗唱や謡の練習ができた。★相対音階であること、息の強さや腹に力を入れ腹から声を出すことを河村さんの実演から学んだ。★能舞台はお客に楽しんでもらえる目に見えない工夫が多くあることを学んだ。能は「人の心を描くもの」に感動した。★囃子の楽器は、同じ楽器をいろんなたたき方で音の高さなどを変えているとわかった。かけ声をかけながら、それぞれの役の人が音を引っ張って新しい感覚の音楽を創り出しているのがすごい。★型は同じでも少しずつ変えていくことでたくさんの情景を表しているということを学び、すごいと思った。余分なものを省いてシンプルにして伝えていくこと（引き算）が能の表現だとわかった。型はその特徴をつかみ表現することで外国人にも伝わるといった。「見えないものを見ること」に感動した。能、古典が好きになってきた。様々な工夫がある能はこの時代に生きている私にも新しいとを感じるものであった。言葉で説明しなくても伝わることを知った。

○第3時『船弁慶』の子方と名のり

時 間	学 習 活 動	支援及び指導上の留意点	評価の観点・評価基準 等
7 分	『船弁慶』のあらすじを聞く。	登場人物や地名など、あらすじを把握できるよう黒板に説明を書く。	あらすじをもとに場面をイメージしようとしているか。

10 分	子方の謡の練習をする。	平らな音のつながりを三線譜でイメージさせる。	義経の意思を感じて謡えているか。
13 分	知盛の名のりの練習をする。	知盛の思いを声でイメージさせる。 手振り映像を注視させる。	知盛の恨めしさを表現しようとしているか。
15 分	『船弁慶』（後シテ）「そもそも～最後」を視聴する。	登場人物のそれぞれの謡が物語のどこで謡われているのか注目させる。	子方と知盛の名のりが効果的に語られていることに気づいているか。
5 分	感想を書く。	場面ごとの謡の効果について考えさせる。	学んだことが書けているか。

★子方は、そのままの音程で長く謡を謡えるなんてすごいと思う。声の強弱がはっきりしていて、発声のイメージも能楽師と一緒にだったので、子どもでも能楽師はすごい。なぜ息がこんなに続くのか感動した。★義経を恨んでいる知盛の声が聞いただけで霊とわかり見ている人にもわかりやすかった。知盛の幽霊が出てくるときや戦うときの音楽や踊りがとても盛り上げられていてすごく見入ってしまった。知盛が襲ってくるころなどきどきして面白かった。知盛の幽霊が義経を見つけたとき「これは義経～」というせりふの口調が強弱がはっきりしていて、テンポが変則的で、とても義経を恨んでいることが伝わってきた。★迫力があつた。亡霊との戦いは緊迫感が凄かった。役を終えると静かにサッと帰るのが格好よかった。一つ一つの動作が最後まで丁寧（丁寧）だった。言葉は今の話し方と違うから聞き取りにくかったが、動きでだいたいの流れや心境がわかったからすごいと思った。謡を謡う時も勇ましく謡い、勇ましが伝わってきた。謡い方に注意することで様々な表現ができるとわかった。一度生で見てみたい。

3. 成果と今後の課題

3. 1. 成果

① 古典（能楽）との新たな出会い

- ・語り物（口承文芸）としての能との出会いにより、語り物の成立過程や伝承について理解を深めることができた。
- ・生徒自らが能（謡）を謡うことで、登場人物の心情や背景をよりよく理解することができた。古典の中にあらわれたさまざまな登場人物に憧れを懐くこともできた。また、さまざまな能の謡に触れ、それぞれの工夫を自分の謡に採り入れることができた。
- ・能楽（能・狂言）の型や見立てを自分の語りに採り入れることができた。

- ・演劇としての能楽や音楽としての能楽を知り、歴史文化的観点から古典を考える視点を得ることができた。

② ICT 活用による専門家の指導の普及

- ・ICT の普及により、映像による記録の保存が飛躍的に進

み、芸能者や専門家による古典の語りを動画等で視聴することにより、紙面だけでは説明できない語りの工夫に生徒たちは気づくことができた。

・これら ICT の活用による生徒の学びの成果の共有化を図ることも本研究の目的の1つであった。具体的には、ビデオカメラや iPad を使って生徒の謡や語りを録画し、電子黒板等で相互視聴することで、クラスや学年単位を越えて成果や課題を共有するシステムを構築したいと考える。

③ 生徒の相互理解と自己肯定感が高まった

・古典の暗唱や謡を披露することを段階的に課題を共有しながら進めていくことで、徐々に苦手意識を克服させることができた。仲間とともにやり遂げられる自分を肯定できる力が高まり、その他の取組にも意欲的になってきた。

・生徒間で暗唱や謡をやり遂げることについての相互理解が高まるとともに語る自分を客観視できるメタ認知能力が高まってきた。

3. 2. 今後の課題

① 能楽発祥地としての奈良の探究

今回はあまり触れることができなかった奈良での能楽の伝統や能楽の大成者としての観阿弥、世阿弥の生き様等について地元ならではの遺産を生かした古典の教材化を進める必要がある。能楽に関わる古典は今でも全国各地に残っている。それらを古典と現在とを繋ぐ鍵として教材化したい。

② ICT の活用の役割

ICT の普及により映像による成果や課題の共有化や記録の保存が飛躍的に進んだ。授業の導入や意欲喚起、また今回は「謡」の稽古に ICT は大きな役割を果たした。しかし、本物との出会いや実際の体験には換えられない。能楽の専門家による昨今の動画公開は、能楽の普及に大きく拍車をかけたといっても過言ではないが、ICT の活用でよしとするのではなく、本物とを繋ぐ架け橋としての役割を十分に試行し、検討していきたいと考える。また今後は、映像資料や児童生徒の学びの成果がポートフォリオ的に集約し、それを活用しながら、ルーブリック評価の基準作成につながる手法の開発に努めたい。

参考文献

- 西野春雄（1998）「謡曲百番」、新日本古典文学大系 57、岩波書店
橋本朝生・土井洋一（1996）、「狂言記」、新日本古典文学大系 58、岩波書店
横道万里雄・表章（1960/1963）、「謡曲集上・下」、日本古典文学大系 40.41、岩波書店。
小山弘志（1960/1961）、「狂言集上・下」、日本古典文学大系 42.43、岩波書店
北川忠彦・安田章（2000）、「狂言集」、新編日本古典文学全集、小学館

- 小山弘志・佐藤健一郎（1997/1998）、「謡曲集 1・2」、新編日本古典文学全集 58.59、小学館
伊藤正義（1983/1986/1988）、「謡曲集上・中・下」、新潮日本古典集成、新潮社
表章・天野文雄（1987）、「能・狂言」、岩波書店。
大村はま（1991）、「古典に親しませる学習指導」、筑摩書房
渡辺春美（2007）、「戦後における中学校古典学習指導の考究」、溪水社
津村禮次郎（2001）、「能がわかる 100 のキーワード」、小学館
山崎有一郎・葛西聖司（2003）、「能・狂言なんでも質問箱」、檜書店
金子直樹・岩田アキラ（2001）、「能楽鑑賞百一番」、淡交社
石井倫子（2009）、「能・狂言の基礎知識」、角川書店
戸井田道三（2008）、「能楽ハンドブック」、三省堂
内田樹・観世清和（2013）、「能はこんなに面白い!」、小学館
林望（2009）、「能よ古典よ」、檜書店
三浦裕子（1998）、「能楽入門〈1〉初めての能・狂言」、小学館
野上豊一郎（1940）、「能の話」、岩波書店
梅若猶彦（2003）、「能楽への招待」、岩波書店
兵藤裕己（2009）、「琵琶法師 CD 付」、岩波書店
別役実・谷川俊太郎（2010）、「能・狂言」21 世紀版少年少女古典文学館、小学館
茂山宗彦・茂山逸平（2006）、「狂言」、こども伝統芸能シリーズ 2、アリス館
初山千代（1996）、「能 知識図絵日本の伝統」、大日本図書
織田紘二（2006）、「舞台芸術「表」「裏」絵事典」、PHP
鈴木啓吾（2014）、「能のうた—能楽師が読み解く遊楽の物語」、新典社
横道万里雄（2013）、「横道万里雄の能楽講義ノート 謡編」、檜書店
藤波重満（2004）、「よくわかる謡い方（1）」、檜書店
藤波重満（2004）、「よくわかる謡い方（2）」、檜書店
藤波重満（2005）、「よくわかる謡い方（3）」、檜書店
藤波重満（2007）、「よくわかる謡い方（4）」高砂・屋島・熊野・船弁慶・鞍馬天狗」、檜書店
渡辺睦子・増田正造（2009）、「まんが能百番」、平凡社
渡辺睦子・増田正造（2011）、「もっと知りたい 続まんが能百番」、平凡社
村 尚也（2011）、「まんがで楽しむ狂言ベスト七〇番」、檜書店
村 尚也（2007）、「まんがで楽しむ能の名曲七〇番」、檜書店

三浦裕子・増田正造・小山健太郎(1996)、「まんがで楽しむ能・狂言」、檜書店

山本東次郎・近藤ようこ(2005)、「中・高校生のための狂言入門」、平凡社

小林貢・油谷光雄(2008)、「狂言ハンドブック」、三省堂

藤田洋 (2006)、「歌舞伎ハンドブック―歌舞伎の全てがわかる小事典」、三省堂

藤田洋 (2011)、「文楽ハンドブック」、三省堂

村上紀夫(2013)、「まちかどの芸能史」、解放出版社

渡辺京二(2005)、「逝きし世の面影」、平凡社

【音源・画像】

日本コロムビア(2012) 「琵琶～平家物語の世界 CD」、鈴木まどか(2004)、「CD-BOOK で楽しむ「平家物語」名場面」、講談社

京都大蔵流茂山千五郎家(2005)、「狂言への招待 DVD」、NHK エンタープライズ

茂山千作・茂山千五郎(2003)、「京都狂言・茂山千五郎家唐相撲 DVD」、関西テレビ

【ホームページ】

公益社団法人能楽協会 <http://www.nohgaku.or.jp/>

京都観世会館 <http://www.kyoto-kanze.jp/access/index.htm>

国立能楽堂 <http://www.ntj.jac.go.jp/nou.html>

独立行政法人日本芸術文化振興会 文化デジタルライブラリー <http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>

お豆腐狂言茂山千五郎家 <http://www.soja.gr.jp/>

※各地の能楽堂のホームページも活用できる。

謝辞

この実践を進めていく中で、伝統音楽普及促進事業実行委員会の河村晴久先生（重要無形文化財能楽総合認定保持者・観世流シテ方能楽師）をはじめ、奥忍先生（大阪芸術大学講師）、藤田隆則先生（京都市立芸術大学教授）、実行委員の皆様には、能楽の理論と実演、授業実践へのヒントをご教示頂きました。ここに記し感謝の意を表します。